入選　大阪府　向山 政江 様（６０代　女性）

今年４月のことだった。突然、日本年金機構から「父が２０歳前後に働いていた数年間の年金が未払いになっていた記録が見つかったのでその分を母の口座に振り込む」と通知があった。それはもう６０年以上も前のことなので「まさか今頃そんな年金がもらえるとは……」家族のだれもが驚いた。

そういえば、私は以前父から漠然と聞いたことがあった。

父の青春時代、その頃の日本は戦争の真っただ中にあって、大阪堀江の自宅から「Ｉ工業高校」に通っていたという父は軍需工場に徴用され、勉強もまともにできなかったそうだ。空襲で家は焼失し、父のすぐ上の兄は戦死し、祖父は定年で仕事を失くしていたため、終戦後間もなく一家は故郷の徳島に引き上げた。しかし、当時Ｎ運送に勤めていた父だけは、しばらくの間、大阪に残り働いていたらしい。父はその頃のことをあまり話さなかったが「Ｎ運送の前に少しだけＳ酒造で働いたこともあったんや」と自慢げに言っていたことがあった。どのような経緯だったのか、もっと詳しく聞いておけばよかったと今更思う。

その後、父は母と結婚し祖父母たちの求めに応じて徳島に戻ったが、今回の未払い年金は終戦前後の混乱期、父が青春と引換えに働いたことへのご褒美だと私には思えた。当時のことだから、納めた保険料はわずかな額に違いない。しかし、６０数年という長い年月が大きな利息をつけて、父に還ってきた。いや、父が受け取るはずだった年金は、本人死亡のため配偶者の母が代わりに受け取れたのだ。

その母は昨年の８月、大腸がんの手術をうけ、人工肛門（ストーマ）になってしまった。８６歳という高齢のうえ、膝の悪い母は歩くのも困難だ。週２回のデイサービスに通う以外、外出もできず、寝たり起きたりの生活をしている。それまで、元気で明るかった母が、生きる気力を失くし、だんだん衰弱していく姿に家族の誰もが心を痛めていた。

そんな時、今回の「未払い年金のお知らせ」は母に驚きとともに、父との思い出を蘇らせてくれたのだ。

「きっと、父さんが応援してくれてるんよ。病気に負けるなって。母さんに散々苦労させたから悪いと思ってるんだわ」そう言う私に
「そうやな、こんなにようけ年金もらえてありがたいわ」母は目を瞬いた。
　私には母に対する父のエールのように思えた。
　若い頃、田舎に戻ったものの、父は長い間定職がなく、大阪に出稼ぎに行ったり、仕事を転々と変えたりしていた。その鬱憤からか、酒に酔うと、母に八つ当たりして時には手を挙げることもあった。そんな父に母は一生懸命尽くしてきたのだ。
　数年前、「消えた年金問題」が発覚し、当時の社会保険庁等に対して、国民の不信感が沸きあがった。その後、組織が変わり年金受給者に対して細やかに対応してくれるようになった。年金加入記録に漏れや、誤りがあるか確認して、回答するようにと「年金定期便、特別便」も送られてきた。そんなチャンスを与えてもらっているのに、私はあまり真剣に見ていなかった。どうせ自分には関係ないと思って、郵便物をそのままに放置していた。
　しかし、今回、日本年金機構によって父の遠い過去の年金記録を調べてもらえた。どんなに大変な作業だっただろうと思う。私は感動し、また感謝の思いが沸いてきた。それは金銭だけの問題ではない。亡き父の人生の一片に光を当ててもらえたように思えたからだ。
　少子高齢化が進んでいくなかで、年金保険制度の運営はますます厳しくなっていくと思うが、日本が誇るこんな素晴らしい制度がこれからもずっと続いてくれるように、今私は心から願っている。